

常識と異なるものを好み
常識に捉われない生き方

東向島から隅田川に掛かる白鬚橋を渡り、明治通りを箕輪方面に歩いていく左側に、清川2丁目と記された信号が出てくる。そこを左に折れ、少し歩いた場所の橋場2丁目に日本のレオナルド・ダ・ビンチといわれた平賀源内の墓はある。

以前この場所にあった総泉寺は昭和3年(1928)に板橋に移転したが、墓はそのまま残され、3年後の昭和6年、旧高松藩当主・松平頼壽が築地塀を整備。昭和18年(1943)に国指定史跡となった。

源内の墓は、角塔状で笠付、角石に「平賀源内墓 安永八己亥年 智見英雄居士 十二月十八日」と彫られ、敷地内には「嗟非常人、好非常事、行是非常、何死非常」と記された墓碑が建つ。

これは、無二の親友であり、源内の葬儀を執り行なった杉田玄白が、故人を偲んで建てたもので、要約すると、「貴方はおおよそ常識という言葉には当てはまらぬ人で、常識とは異なるものを好み、常識にとらわれない生き方をしてきた。しかし、死ぬときぐらいいは豊の上で、普通」に死

この電気を鉄くずと松脂の入った蓄電瓶に蓄え、箱の上部に取り付けた銅線に導くことで、パチパチと火花が散る、という仕組みだった。彼はこの研究に7年の歳月をかけ、その後も「火流布」という、燃えない布(石綿の耐火布)や「万歩計」「寒暖計」、さらには「磁針器」など100種にも及ぶ製品を発明、注目を浴びることになる。

エレキテルのおかげで、源内の名前は江戸中に知れ渡った。評判が評判を呼び、源内のエレキテル実験には各地から大名がこぞって見物に来るほど、賑わいを見せたという。ところが、世間の賑わいとは裏腹に源内の心は空虚になるばかりだった。というのも、人々の関心は彼の発明した科学の力ではなく、キワモノ的な珍しさだったからである。〈功ならず 名ばかり遂げて 年暮れぬ〉

これは、源内が当時の心境を綴った句である。多方面にわたる才能を持ちつつも、時には変人扱いされ、社会に受け入れられない。やがて世間に対して冷笑的な態度を取り始める源内。

そして、安永8年(1779)11月、悲劇の「一大事」は起こった。

んでほしかった」というものだ。杉田玄白をしてそう言わしめた、源内の変人ぶりとはいかかなものだったのか。そして、波乱に満ちた人生の一大事とは……。

芸術から発明まで
その才能は天を衝く

エレキテルの発明者として知られる源内は諱を国倫(くにのり)といい、高松藩足軽白石良房の三男として生まれた。

24歳で藩の命を受け長崎へ遊学した源内。そこで蘭学を修め、江戸に出た後、漢方医学である「本草学」を学び、本草学者として高松藩の薬坊主格に取り立てられることになる。

墓が語る 一大事

国指定史跡 平賀源内

日本が生んだ希有な天才。それが平賀源内だ。飛び抜けた好奇心で梓の中に収まらず、用いたその名は、画号の鳩溪、俳号の李山、戯作者の風来山人、浄瑠璃作者の福内鬼外、殖産事業家では天竺浪人、貧乏時代は貧家銭内と洒落のめす。創った発明品はエレキテル、火流布ほか100種、物産会を主催するやら鉱山開発をするやら、陶器に毛織物まで製造した。こんな男は空前絶後だ。



平賀源内肖像／「戯作者考補遺」表紙絵。慶應義塾図書館蔵。

そいつは戯れ言か！
こちとら何でもござれだ
悔しけりや
目ん玉飛び出るもんでも
創りやがれ!!

当時、源内は初代の持ち主が切腹し、次の持ち主も井戸で死んだという、いわくつきの屋敷に引っ越していた。

ある晩のこと。源内は知人の町人と酒を酌み交わしていた。この町人という人物に関しては大工の棟梁という説と、久五郎という弟子だという説のほか、丈右衛門という友人だったという説などさまざまある。

ともあれ、宴は夜中まで続いた。ところが、翌朝起きると懐に入れておいた大切な書類が消えている。とっさに、盗まれた!と思った源内は男に詰め寄り、押し問答の末に激昂、ついに男を斬り殺してしまふのだ。だが、書類はすぐに別の場所で見つかった……。

これが、後に高松藩出身の木村黙

ところが、藩の許可なく国内外を自由に行き来できないことが不便でならない源内は、二度脱藩。二度目の33歳での脱藩では、高松藩から他藩への仕官を禁止する「仕官御構」の処分を受けることになった。

だが、この男がそんなことでめげるはずもなかった。それどころか、「これでやっと自由の身になれた」とばかり、自ら「天竺浪人」と名乗り、秋田秩父での鉱山開発を手始めに、木炭の運送事業や毛織物生産、さらには輸出用の陶器製作、はたまた珍石・奇石のブローカーなど、さまざまな事業に手を出す多能ぶり。また、日本初の洋風画「西洋婦人

日本が生んだ希有な天才。それが平賀源内だ。

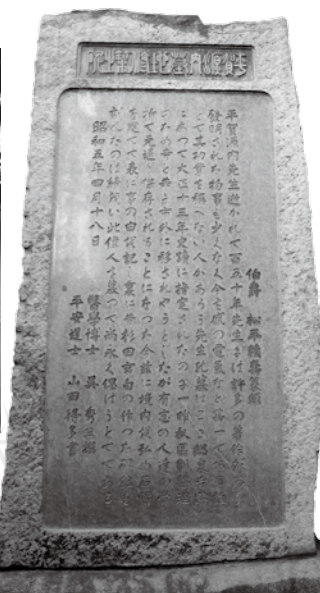
飛び抜けた好奇心で梓の中に収まらず、用いたその名は、画号の鳩溪、俳号の李山、戯作者の風来山人、浄瑠璃作者の福内鬼外、殖産事業家では天竺浪人、貧乏時代は貧家銭内と洒落のめす。創った発明品はエレキテル、火流布ほか100種、物産会を主催するやら鉱山開発をするやら、陶器に毛織物まで製造した。

ひらがげんない●享保13年(1728)～安永8年12月18日(1780年1月24日)。讃岐国寒川郡志度村で生まれ、白石良房の三男(生年には諸説あり)。生家は讃岐高松藩足軽の身分。幼少より人に抜きんでいたため、13歳から本草学、儒学を学ぶほか、俳諧なども嗜む。24歳で長崎に遊学し、本草学のほかオランダ語、医学、油絵を学び、家督を継いだ際に祖先の姓「平賀」を用いたが、妹に婿養子を迎えさせ、家督を放棄。その後も大阪、京都、江戸、長崎に赴き、漢学、鉱山採掘・精錬技術をもものにする。度々物産博覧会などを催し、杉田玄白らとも交友を広げる。川越藩秩父大滝や出羽秋田藩で鉱山開発を行ない、秋田藩士小田野直武に蘭画技法を伝える。安政5年(1776)に長崎で入手したエレキテル(摩擦起電機)を修理復元したことはあまりにも有名。多くの顔を持ち、本草学者・地質学者・蘭学者・医者・殖産事業家・戯作者・浄瑠璃作者・俳人・蘭画家・発明家として活躍した希有な才人。

老が「聞ままの記」に記した。源内殺傷事件の顛末である。酔っていたとはいえ、勘違いで人を斬り殺してしまった源内は、殺人犯として小伝馬町へ送られることに。投獄された源内は発狂したとも伝えられるがそれも定かではない。

獄入り約1か月後の12月18日、厳寒の牢内で獄死。享年52。直接の死因は破傷風だったという。

ただし、この話にも諸説あり、杉田玄白らが遺体を引き取りに行ったものの幕府から許可が下りず、墓碑もなく遺体もいまま葬儀だけを行なったという説。また、書類の上では死亡したことにはしたが、実は田沼意次の慈悲で故郷の高松に逃げ延び、松平家の庇護下に置かれ、天寿を全うしたとも伝えられる。



文=植木倫太郎 写真=韭谷真紀

図」を描いたり、浮世絵では多色刷りの技法を編み出すなど、文学や芸術方面でも、才能をいかんなく発揮。広告宣伝にもたけていたようので、「夏バテ防止のために土用の丑の日にウナギを食べる」風習も、夏場の売り上げ不振に悩んだ鰻屋に請われて、源内が「本日土用丑の日」という広告キャッチコピーを考案。それが世に広まったとされる。

そんな源内が安永5年(1776)、復元に成功したのが、長崎で手に入れたエレキテル(静電気発生機/摩擦起電機)だった。エレキテルは箱の中にベルトで結んだガラスをぶら下げ、瓶には金箔を貼った枕のようなものが付いていて、その摩擦により電気が生まれるというもの。

あまりにも
好奇心が多すぎて
未完成ばかりとなる

さまざまな業績を残し、日本のダ・ビンチと称される平賀源内。ご存じ、ダ・ビンチは15世紀末から16世紀の初めにかけて活躍したイタリアの芸術家だ。そんなダ・ビンチが種々の分野で才能を示して華々しい成功を収めたのに対し、源内が手掛けた仕事は結果的にほとんどが、未完成のままに終わってしまった。

それはなぜなのか? 理由のひとつには、源内が生きた時代がまだ鎖国だったこともあり、いかに天才とはいえ、限られた情報量の中ですべてを成功させることが不可能だったことが上げられよう。もうひとつは彼の強すぎる好奇心が原因だった。

つまり、好奇心があまりに旺盛だったため、ひとつのことを深く掘り下げて研究する暇がなかった。それが一番大きな要因だといわれる。

ただ、あるいは彼が中世イタリアに生まれていたら……。ルネサンスの巨人として人類の歴史にその名を刻んでいたのではないか。歴史にifはないが、そんなことを思わせる異才が平賀源内であった。